

## 2月1日(日) サムエル記第一18章20～27節

「ダビデは立って、部下と出て行き、ペリシテ人二百人を討って、その陽の皮を持ち帰った。こうしてダビデは、王の婿になるために、王に対して約束を果たした。サウルは娘ミカルを妻としてダビデに与えた。」(27節)

---

サウルの娘ミカルがダビデを愛していることを告げられると、「そのことはサウルの目には良いことに思え」ました。なぜなら「ミカルは彼にとって罫となり」(21節)とありますように、ダビデを殺したいと思っていたサウルは、娘のミカルを利用すれば、再度ペリシテ人の手が下ることで、ダビデを殺す好機が訪れると思ったからです。

まずサウルがダビデに「今日こそ、おまえは婿になるのだ。」と言い、さらに家来を使ってひそかにダビデに婿になるように言わせました。しかし、ダビデは23節で「王の婿になることがたやすいことに見えるのか。私は貧しく、身分の低い者だ」と言います。つまり、身分が不釣り合いであることを理由にダビデはこの申し出を断りました。ここにもダビデの謙遜さが現れています。それを聞いたサウルは、ダビデが「私は貧しく」と言ったことについて、「王は花嫁料を望んではない。」と家来に言わせ、ペリシテ人に手を下させてダビデを殺すために「ただ王の敵に復讐するため、ペリシテ人の陽の皮百だけを望んでいる」と伝えました。陽の皮とは男性器の皮のことで、割礼を受けていないペリシテ人を百人討ち取った証拠とするためにダビデに求めたのです。そうしますと、ダビデは百人どころかペリシテ人二百人を討ち取って、その陽の皮を持ち帰り、王は約束通りミカルを妻として与えました。

主が離れ去ったサウルは、ダビデを殺すことばかりを考えるようになりました。主がともにおられないことは、その人の思想や考えにも悪影響を与えます。そして、主はご自身から出ていないさまざまなはかりごとをことごとく失敗させますが、主はご自分に従う者とともについて、その者を守ってくださり、ご自分の栄光を現わされるのです。

## 2月2日(月) サムエル記第一18章28～30節

「サウルは、主がダビデとともにおられ、サウルの娘ミカルがダビデを愛していることを見、また知った。」(28節)

---

「ヨナタンは、自分自身のようにダビデを愛し」(1節)ました。また、「サウルの娘ミカルはダビデを愛してい」ました(20節)そして「イスラエルもユダも、皆がダビデを愛し」ました。

(16節) その中にあってサウルだけがますますダビデを恐れ、サウルはずっとダビデの敵となりました。サウルがますますダビデを恐れた理由の一つは、娘ミカルとの結婚により娘婿となったダビデが、いつ王の座を奪うか分からないと思って、疑心暗鬼になっていたからでしょう。特に、人々の心が自分から離れて行けば、そのうちダビデが謀反を企てるかもしれないと思ったのかもしれませんが。本来、王の座はサウルが主から与えられたものです。しかし、サウルはそのことを忘れて、イスラエルの王座を自分の力で勝ち取ったと思うようになったのでしょうか。私たちが主が恵みによって与えてくださったものを自分のもののようにして、握りしめているものはないでしょうか。それは私たちに失うことの恐れを持たせ、私たちから平安を奪い去ります。みこころにより主が取られる時には、いつでも手放せる用意がなければなりません。

「サウルは、主がダビデとともにおられ、サウルの娘ミカルがダビデを愛していることを見、また知った。」とあります。どの程度サウルは、主がダビデとともにおられたことを知ったのかは定かではありませんが、少なくとも、サウルは主がともにおられることを認めざるをえなかったのです。私たちも未信者の中にあつて、主がともにおられるような歩みをすれば、必ず周りがそれを見て、知るようになります。そして、それが私たちの信仰の証しとなります。特に、ダビデに対するサウルのように、自分に反対し、敵意すら示すような相手に対してでも、私たちは主がともにおられるように歩むべきです。

## 2月3日（火）サムエル記第一19章1～3節

**「サウルは、ダビデを殺すと、息子ヨナタンやすべての家来に告げた。しかし、サウルの息子ヨナタンはダビデを非常に愛していた。」（1節）**

---

サウルは、息子ヨナタンやすべての家来の集まっている場において、ダビデを殺すと公に宣言します。これまではペリシテ人に手を下させることで殺そうとしましたが、うまくいかなかったので、それであれば自分が殺そうということなのかもしれません。恐らく皆は驚いたことでしょう。自分の娘婿であり、何か特別な失態があったわけではなく、逆に戦術にすぐれ、また勇敢に人々の先に立って行動するダビデを、イスラエルとユダの人々は皆、彼を愛していたからです。（18章16節）

ダビデを深く愛していたヨナタンも、心を痛めたことでしょう。ですから、サウルの殺害計画をダビデに告げます。そして隠れ場にとどまって身を隠すように言います。これは、まさに父であり王であるサウルに対する反逆行為であり、もしそのことがサウルに知れたら大変なことになります。しかしヨナタンのダビデに対する愛がまさったということです。

自分の身を案じて逃がそうとしてくれるヨナタンにダビデはどれほど慰められたことだろうかと思います。ここに私はある意味主にある兄弟姉妹の交わりの姿を見ます。私たちの主にある兄弟姉妹に対する愛は、理不尽なかたちで命を狙われることとなったダビデを慰め、励ましたように、さまざまな苦難の中を通っている兄弟姉妹を慰めたり、励ますような愛となっているのでしょうか。本当に慰めが必要な時に、私たちは、その兄弟姉妹のもとで寄り添っているのでしょうか、それは苦しみの中にある人々のために私たちが真実な祈りの手を上げ続け、苦しむその人に主のみわざを見させる祈りとなっているのでしょうか。愛は時間に比例します。それは、人の心の中にあることをただひたすら聞くための時間と私たちの隣人のために祈りの手を上げ続けるためにかける時間です。

## 2月4日（水）サムエル記第一19章4～7節

**「王よ、しもべダビデのことで罪を犯さないでください。彼はあなたに対して罪を犯してはいません。むしろ、彼のしたことは、あなたにとって大きな益となっています。」（4節）**

---

ヨナタンは必死になってダビデを弁護しようとし、王に代わって「王よ、しもべダビデのことで罪を犯さないでください。彼はあなたに対して罪を犯してはいません。」と言います。為政者が罪なき者の命を奪うことは、まさにそれは王の罪となります。さらにダビデはサウル王に対して罪を

犯していないどころか、「彼のしたことは、あなたにとって大きな益となっています」と言い、その益とは5節で「彼が自分のいのちをかけてペリシテ人を討ったので、主は大きな勝利をイスラエル全体にもたらしてくださった」ということです。さらに5節の後半でもう一度「なぜ、何の理由もなくダビデを殺し、咎のない者の血を流して、罪ある者となられるのですか。」と訴えます。それでサウルは、ヨナタンの言うことを聞き入れ、「主は生きておられる。あれは殺されることはない」と誓いました。

ダビデを非常に愛していたヨナタンは、必死になってダビデのいのちを助けようと弁護します。しかし、人となってこの地上に来られたイエス様のことを愛し、イエス様を罪なき者として人々の前で弁護する者は一人もありませんでした。むしろ、祭司長、パリサイ人、律法学者、長老たちなど当時の宗教指導者たちは、罪を犯されなかったイエスキリストを十字架につけることで、大きな罪を犯し、それらの宗教指導者たちにより扇動された人々は、イエス様を「十字架につける」と叫び、そして十字架につけられたイエス様は、周りから嘲られ、ののしられました。そしてイエス様は全人類の罪の贖いとなるために、一人であつて十字架への道を歩まれたのです。しかし、そのイエス様を死からよみがえらせ、「それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。」(ピリピ人への手紙2章9節)とありますように、父なる神様は、イエス様が罪を犯されることなく、十字架の道を歩み通されたことにより、すべての名にまさる栄光をお与えになられたのです。私たちも、キリスト者であるがゆえに、いわれなき攻撃や迫害、侮辱などを受けることがあるかもしれません。しかし、すべてをご存じの父なる神様だけは私たちに対して栄光をもってその信仰の歩みに報いてくださるのです。

## 2月5日(木) サムエル記第一19章8～17節

**「サウルは槍でダビデを壁に突き刺そうとした。ダビデがサウルから身を避けたので、サウルは槍を壁に打ちつけた。ダビデは逃げ、その夜は難を逃れた。」(10節)**

---

再びダビデはペリシテと戦い、大勝利をあげ、ペリシテはダビデの前から逃げ出しました。そのダビデに対してサウルは槍で壁に突き刺そうとしましたが、ダビデがサウルから身を避けたので、難を逃れました。

しかし今度は使者たちをダビデの家に遣わし、ダビデを殺そうとします。しかしダビデの妻ミカルが、このことを察してダビデを窓から降ろして、彼を逃がし、寝床を偽装することで時間をかせぎました。サウルがダビデを再び殺そうとしたことについて、サウルはヨナタンに語った誓いなど何も気にしていなかったと言う人もありますが、9節に「わざわざをもたらす、主の霊がサウルに臨んだ」とありますので、サウル自身もそのようなものに抗うことができなかったとも考えられます。

今日の個所で二回「難を逃れた」とあります。(10節、12節)このことから分かることは、主は常に私たちを危険から守って難を逃れさせてくださるということです。特に、12節では妻ミカルを用いて主はダビデに難を逃れさせられました。この当時、娘の父親に対する忠誠は絶対的なものがあり、それは自分の夫にもまさるものでした。それでもミカルは、父親よりも夫の身の安全を最優先したのです。それは、ミカルにとってダビデが愛する夫であったということも大きかったことでしょう。しかし、それと同時に主がミカルを用いてダビデを助けられた

のです。主は、常に私たちを見ていてくださり、あらゆる危険やわざわいから守られます。ですから私たちは信仰により日々安心して、心穏やかに過ごすことができます。

## 2月6日（金）サムエル記第一19章18～24節

「彼にも神の霊が臨んだので、彼は預言しながら歩いて、ラマのナヨテまで来た。」（23節）

妻ミカルによって助けられたダビデは逃げて、難を逃れました。行先のないダビデは、自分に油を注いだサムエルのところへ行きました。ラマは、サウルの王宮のあったギブアから数キロしか離れておらず、歩いて一時間以内で行けるような非常に近い距離にありました。そう考えると、とても適切な逃げ場所とも思えませんが、むしろダビデのサムエルに対する信頼関係によって、そこを選んだのでしょう。あまりにも近い場所でしたから、すぐに「ダビデは、なんとラマのナヨテにいます」との知らせがサウルのもとに届きました。その知らせを聞いたサウルは、ダビデを捕えるために、すぐに使者たちを遣わしました。ラマに着いたサウルの使者たちは、預言者の一団が預言するのを見、その真真中にサムエルが立っているのを見ました。すると、サウルの使者たちにも神の霊が臨み、彼らも預言しました。その後同じことが繰り返され、21節を見ますと遣わされた三度目の使者たちも同じように預言し、ダビデを捕らえることができませんでした。そしてこれでは埒が明かないと思ったのでしょう。22節では、サウルが直接ラマに来ました。彼は「サムエルとダビデはどこにいるのか」と尋ね、「ラマのナヨテにいます」との返事を得ます。そこへ行く途中で、サウルにも神の霊が臨み、預言しながら歩いてラマのナヨテまで来ました。そして、「彼もまた衣類を脱ぎ、サムエルの前で預言し、一昼夜裸のまま倒れてい」ました。その姿は、王としての威厳を全く失ったものでした。結局、裸のまま倒れていたサウルは、王の服を神によって脱がされたわけですが、まさに神ご自身がサウルを王位から引きずり下ろしたとも言えます。まさに、そのサウルの姿は、高ぶる者が神によって低くされた姿とも言えるでしょう。

神ご自身が神の霊を臨ませることで、ダビデを助けられました。私たちは逃げ場所がないと思える時、また危機的状況の時に、どこに助けを求めるのでしょうか。私たちは、自分で何とかしようと焦るかもしれません。また人の目から見て最善の場はどこかと考えるかもしれません。しかし何よりもまずは、神に助けを求めるべきです。そして、私たちには何でも話せて、祈ってもらえる兄弟姉妹のいる教会があります。教会に助けを求め、ここを自分のたましいの避け所とさせていただきましょう。

## 2月7日（土）サムエル記第一20章1～4節

「とんでもないことです。あなたが死ぬはずはありません。父は、事の大小を問わず、私の耳に入れずに何かをするようなことはありません。どうして父が、このことを私に隠さなければならぬのでしょうか。そんなことはありません。」（2節）

ダビデは、ラマのナヨテにいるサムエルを頼ろうとしましたが、そこへもサウルが追ってきたので、急いでそこから逃げて、今度はヨナタンのもとへ身を寄せます。そして、心を許すことのできるヨナタンに、自分にはどんな罪があつて、サウルは自分を殺そうとするのかと尋ねま

す。それに対してヨナタンは、「とんでもないことです」と否定します。そして「あなたが死ぬはずはありません」と言います。その理由として、もしダビデを殺そうとするなら、すぐに自分の耳に入れるはずだけれども、そのようなことを自分は聞いていないからだと説明します。しかし、実際にサウルによって命を奪われそうになり、サウルの手から逃げていたダビデからすれば、ヨナタンが悲しまないように、このことは知らせないでおこうと思っておられるだけだと言います。「私と死の間には、ほんの一步の隔たりしかありません。」とは、ダビデはまさにいつ命を奪われるか分からない危機的状況の中にあって、常に死を間近に感じているということです。ダビデの置かれている状況をヨナタンは理解したのでしょうか。「あなたの言われることは、何でもあなたのためにします。」と言い、ヨナタンは、どんなことをしてでもダビデを助けることを約束します。

なぜここでダビデがヨナタンのもとへ行ったのか理由は記されていませんが、今のダビデにとって唯一の助けとなるのはヨナタンしかいないと思ったのかもしれませんが。今の私たちに心を許してすべてを話せる友があるでしょうか。特に信仰の友で心を開いて何でも話し、ともに祈れる兄弟姉妹があるでしょうか。私たちは、決して主の家族の中で孤立することなく、何でも話せて祈れる友を持つべきです。そして、私たち一人一人は、信仰の友のために「あなたの言われることは、何でもします」と、ヨナタンのように、信仰の友を心から進んで助けることを喜びとする信仰者でありたいと思わされます。